

## 説教余滴

### 《コロナ禍とハンセン病》

コロナ禍とハンセン病と関連付ける一文がありました。

コロナ禍とハンセン病「今年1月以来、全世界にパンデミックをもたらした新型コロナウイルスは日本においても感染は今なお収束していません。

このコロナ禍の中で、政府は「緊急事態宣言」と「密集・密接・密閉の三密とマスク着用、手洗い」の要請をしました。すると、たちまち日本中がそれを「社会正義」と信じ、それを守らない人やお店への警告ビラやSNSでの誹謗中傷などの現象が生じました。

これと同じ空気感が、かつてハンセン病に対する誤った理解と伝聞によって広がり、偏見・差別を生み出したのです。ただ、コロナ禍との決定的な違いは、国家が「らい予防法」を制定し、この空気感を醸成・強化し「無らい県運動」に国民を駆り立てたのです。

ハンセン病の偏見・差別への闘いが、病気の科学的理解を踏まえて、元患者とその家族の国賠訴訟によって、強いられた「人生被害」を取り戻しました。これが過った空気感に抗う行動ではなかったかと思うのです。

私たちは「今ここ」で何が起きているのかを、不確かな情報によって惑わされず、真実を見極める感受性を育てることが求められています。再び偏見・差別の連鎖を繰り返さないために行動すると共に、世界中のコロナ禍の一日も早い終息を願っています。

好善社社員 長尾文雄 広報誌「ある群像」

2020年12月号

コロナ感染症は、人間の心の闇を教えてくださいました。欧米社会に残る有色人種への差別感情、それはわが国にある別種の差別でもありました。自己中心的な正当性の主張は、寂しいことです。1年前、殺害された中村哲さんを思い起こします。同じ人間です。あのような生き方も可能なのです。差別せず、人々の必要に寄り添って生きることができるのです。希望の光です。